

『忠臣蔵』の口伝〈摘録〉

川尻清潭

〈出典：『演技の伝承』演劇出版社、昭和31年12月〉

鉄砲渡しの笠

五段目の口「鉄砲渡し」の場を、古くは「濡れ合羽」とも云った位、昔は千崎弥五郎が、青漆の合羽を着て出るのが例でしたが、この頃では一様に簑笠の姿が、定めようになりました。中央稍々下手寄りに松の立木、その下に簑笠の勘平が捨石に腰を掛けている模様。〴誰が水無月と白雨の、^{はれま}霽間をここに松の影」で、斜めに持った笠を上げて、初めて顔を見せるのが型ですが、近くは雨を避ける方へ心を入れて、笠を頭の上へ一文字にかざすのもあり、さもなくば笠でまともに顔を隠すのもあって、一向様式美を現わしていない憾みがあります。

それから石碑調達の話になって、弥五郎が郷右衛門の旅宿を書いた物を渡し、勘平の在所を帳面へ書留めるなどの中に、弥五郎の笠の置き方にも心得があり、この間に勘平は鉄砲の火縄へ、弥五郎の提灯の蠟燭の火を移す仕科にまで、それぞれ運びの手順が付けてあります。それから、この場の両人が左右へ別れるところ、弥五郎が先へ上手へ入り、次に勘平が花道へかかり、一度改めて鳴物をオヤし、雨を避ける心に鉄砲の火縄へ、笠を冠せる形を見せて、更に笠を斜にかざし直して向うへ入るのが、絵模様でもあり、いい形でしたが、中には勘平を先に入れて、弥五郎一人があとへ残り、向うを見込んで幕というのもあって、頭の古い私にはどうも肯き兼ねます。

定九郎の今昔

五段目の定九郎のことは、かつて六世菊五郎の芸談を聞いた時、相当くわしい手順を筆記したことに依って、一応の話は出来るつもりで、ここにその要点を挙げて見ます。

昔の定九郎と言え、夜具縞の^{どてら}襦袢を着て、^{おぼなずきん}尾花頭巾を冠り、^{まるく}丸括けの帯に紐付の股引、重ね草履を履いた拵え、山賊のような姿で勤めたことは、古い番付や絵本にも立証されていますが、その頃の定九郎は「オオイオイ親父殿」と、与市兵衛の跡を追駈けてきて、丸本そのままに「こなたの懐中に、金なら四五十両の嵩、縞の財布に有るのを見付けて来たのぢや、貸して下され貸して下され」と言う段取。与市兵衛は「金ではない握り飯」と断わるのを「手ぬるう言えば付け上る、サアその金こゝへ出せ、遅いとたつた一ト討ちと、二尺八寸挿み打ち」と殺しになる段取です。往年歌舞伎の舞台に、七世中車の定九郎と、二世段四郎の与市兵衛で、昔の型を取入れて上演したのと、又、本郷座で二世左団次の定九郎、左升の与市兵衛で復活したことがあって、この時の定九郎は花道から出ましたが、その拵えはいずれも近年見せている写実の形式であったのと、別に明治座で先代関三十郎の定九郎が花道から出て、付際で揚幕の方を向って、破れ俵を冠った形で、大見得を切ったのを見覚えています。

元来定九郎の役は、昔は相中が勤めたもので、いい役者が出なかったもので、明和三年九月の市村座に『忠臣蔵』の出た時、その頃、「芸気違い」と言われて、大評判を取っていた仲蔵の処へ、立作者の金井三笑からわざとこの端役を振ってよこしたのは、その前興行に仲蔵が、三笑の注意を入れなかったのに、腹の立った仕返ししであって、三笑にしても勿論仲蔵は承知すまいと思いの外、「引き受けた」との返事をしたばかりでなく、やんやと当てて見せる念願を起し、柳島の妙見様へ一心籠めて日参の途中、車軸を流す大雨に逢って、蕎麦屋へ馳け込んで雨止みを待つところへ、ずぶ濡れになった三十四五才の浪人が、破れ蛇の目の傘をさして、黒羽二重の引解きの単衣の尻をからげ、肩の出るまで腕をまくり、茶小倉の帯へ朱鞆の大小の落しざし、くすべ鼻緒の雪駄を腰に挟んで、雨を含んだ五分月代を撫でると、ダラダラと雫が落ちる程の有様であったのを、仲蔵はこの様子をそっくり生け取って、舞台へ出る前に楽屋風呂で水を浴びて出たなどの話は、あまりにも有名ですが、以上の写生が追はぎをしそうな人に見えて、大好評を博したのが、今日の型となっているのです。

ところで、九世団十郎がその定九郎を勤めた折、当時まだ子供であった丑之助（後の六世菊五郎）が見習い後見に出て、見学をした話によれば、鬘は熊の五十日、着付けは雨に濡れた心で黒縮緬を使用して、斧のぶっ違いの五つ紋の単衣、お納戸献上の帯蠟色黒柄の大小、（朱鞆を遣うもあり）、紬の下りの端へ鉛の錘おもりを入れるのは、倒れる時に前のまくれぬ用意であったと言います。

先まず花道から与市兵衛が出て、掛稲の前で財布を出して「これからお礼を申します」と押戴くのを、うしろから定九郎が手を差し伸べて取りますが、この時、与市兵衛役者は、右手の小指へ財布の紐をかたげて、これを高く持ち上げるのが法で、紐は与市兵衛の頭を越して、手易く定九郎の手へ渡る段取が考えられてあるのです。

さて、定九郎は財布を口に咬くわえ、右手の抜身と与市兵衛の脇腹へ突込んだ儘、与市兵衛と向い合い、正面稍々うつむきの形で、舞台まん中まで出て、左足で与市兵衛を、下手へ蹴返すのと共に、その足を前へ踏み出して、左手で左裾をまくり、右手の刀を添えて、拭上げて極るのに、見得を切らないのが渋いやり方なのです。

ここで本釣鐘を打ち込み、忍び三重になって、刀の鞆へ納めてから、髪かみの毛の雫を払い、着物の袂たもとと裾を搾り、咬えている財布を左手に取り、右手で中括りの紐の挟んである端を引いて、一廻りだけ解けば、あとは財布の間に、折ってたくしてあるのがダラリと下ります。その紐尻を前へ掛けて、左手の財布の紐付の処を持つと、中の金の重味で財布の折目が伸びて下へ垂れますから、右手を財布へ突込んで、金の勘定をするのですが、金の数え方にもいろいろなやり方があって、一枚々々音をさせて、財布の中へ落すのもありますが、団十郎は原作の「暗がり耳の掴み読み」で、初め財布の中へ手を入れて、封印の儘一度目方を引いて見て、およそ五十両ある見当をつけ、それからコバへ爪をかけて数えながら、口の中で「四十五両、四十六両、四十七両、四十八両、四十九両」までをいい、次ぎに声を出して「五十両」と言うのです。

これをいきなり「五十両」だけを言うと、小判が飛び出すように聞えるので、前からの続きの調子で言うのが、数えてきたことが判るのだと教えたそうです。

それから財布の紐をからげて懐中へ入れ、与市兵衛の死骸を蹴返して片付け、落ちていた破れ蛇の目の傘を拾って、左手で片手開きにして担ぎ、右手は懐へ入れて大股に花道へ掛ると、早笛の鳴物で、向うから猪が来るのを見つけた思入れで驚き、あとずさりに舞台に戻り、傘を投出して両刀を帯から抜取って、掛稲を押分けて中へ入ります。猪が花道から舞台へ来て、一ト廻りして上手へ入りますが、大阪では猪突の意味から一文字に入ります。定九郎はこの間に財布を掛け替えるのは、後に勘平の仕科の都合のいいように、紐の寸法を長く出来ている物と取り替えるわけです。尚、この時に定九郎の腹部へ血糊を塗るのが丑之助（後の六世菊五郎）の役で、擦って塗付けたのを、団十郎に「ペンキ屋のような真似をするな」と言われたそうで、大きな牡丹刷毛へ血糊を含ませて、腹へポンポンと押付けるようにと教えられたとのことでした。そうして、別の仕掛けの紅（口中に入れて嚙むと破れる物）を口へ入れて出ますが、この時に左足の太股から下りへ霧吹きで霧を吹いて置くのは、下りのまくれない為と、又、口から吐く血糊を滲ませる用意です。チョボの「あわやと見送る定九郎が、背骨へかけてどつさりと」の前に、掛稲の中から大小を持って、後ろ向きに姿を現わし、猪の行った方を見送るうち、ぬかるみに滑って片膝を突くのが「脇へ抜ける二つ玉」で、刀を投出して一度倒れ（この時大小がばらばらにならぬよう糸で括ってある）、起上って正面向きになり、ここで腹の血糊を見せますが、この時に右足を内輪に踏出すのは、口から吐く血を受けるため、血潮が流れてから股を開き、虚空を掴む形をして、右足を引いて下手向きになり、本来背キバで倒れて左足を折り、その足首を右足のふくら脛の下へ入れて、右足の先きを浮かして置くのが、あとで勘平が縄を掛けることを、考慮に入れた仕科です。

それから勘平が出て、いつもの縄捌きがあつて、その縄先きを輪にして、定九郎の右足へ掛けるのが、前述のように足が浮いていれば、この仕事がやりいいわけです。尚、勘平は猪と思ったのが人であるのに驚き、薬を探す心に懐中をさぐって、金財布が手に当るので、又驚いて、一度行きかけて御用金のことを考える仕科を見せて立戻り、財布を持って走りかけると、定九郎の上半身が首に掛けた紐に引張られて起き上るのは、仲蔵の型と伝えられています。更に仲蔵の定九郎は勘平が山刀に財布の紐を当てて切ると、そのはずみで猿がえりをしたと伝えられています。

変体の五段目

これは七世中車から聞いた話ですが、同優がまだ中山鶴五郎と名乗っていた時代、名古屋に、虎友という振付があつて、この人の演出の「五段目」が一寸変った趣向で、お約束通り雨車と雷鳴で幕が明くと、山崎街道の場へ、上手から山駕が出て休み、駕舁二人は雨が止んだから一ぷく飲ましてくれと駕を下ろすと、ここへ又、上手から与市兵衛が出てきて、夕立の為に提灯の火が消えている心で、駕屋の提灯の火を借してくれと頼み、火を点

けようとして五十両入の財布を落す。これを駕の中から定九郎が見ているとは知らぬ与市兵衛は、火を借りた札を述べて花道へ入ると、本釣鐘をコーンと打ち込み、定九郎が駕の垂れを上げて、向うを見込んで思入れ、ここで下りると言っ、駕を出て駕賃をやる。駕舁は酒手の多いため追従を残して、空駕を担いで下手へ入る。又、雨車となり、定九郎は濡れるを厭う心に尻からげして、破れ傘を拾うて開き、与市兵衛を追うて花道へ入るので。右の後が勘平と弥五郎の出会い、鉄砲渡しがあつて道具が廻ります。

それからいつもの五段目の掛稲のある舞台となり、向うバタバタで定九郎が出て、付際で揚幕の方へ向き直つた大見得、本舞台へ来て傘を捨て稲叢の中へ隠れる。そのあとへ花道から与市兵衛が出てきて、在来通りの芝居があつて、与市兵衛を殺して金を取り、その死骸を蹴込むまで変つたことなく連び、傘は持たずに花道の付際まで行き、両手を懐中から出して、拳をぶつ違ひに組んで、グット一睨みにらの大見得で極るのが下座のテンテツク（早笛）のかかりで、あとはこれまで通りに進行する行き方です。

更にもう一つ、同じ五段目で、本文通りのチョコボの〴道は闇路に迷わねど、子故の闇につく杖も」と花道から与市兵衛が出ると、それを追馳けるように揚幕から、「おーい、おーい、おやぢ殿」と、定九郎が追付てきて、この街道の物騒であることを捨台詞を言いながら舞台へきて、与市兵衛は「お先きへ参じましょう」と行掛る。そこで定九郎は急場の思付きに腹痛の科しをするので、与市兵衛が立戻つて、所持の提灯を松の枝に掛けて、背中をさすつて介抱して、「せめて含薬の黒丸子でも持つていればよかつたものを」と気を揉むと、定九郎はガラリと調子を変えて、「イヤ、俺の含薬は、熊の胆や黒丸子ではない、チラリと睨んだ縞の財布の四五十両」と、凄味な文句になるので、与市兵衛は「えゝツ」と驚くのを定九郎がそれに冠せて「それが飲して貰いてえ」と言う。与市兵衛が「是は娘が拵えた握りめし、金ではござりませぬ」と、逃げ掛けるを、「四の五を言うと二尺八寸、どつ腹へお見舞申す」と刀を抜いて袈裟掛けに斬り浴せ、それから与市兵衛の長いくどきになります。定九郎は松ケ枝の提灯を取つて、裸蠟燭にして下に置き、傍の石地蔵を蹴倒して台石に腰を掛け、刀は大地へ突立てた儘、天鷲絨びろーどの吹煙草入かみを取出し、提灯の火を煙管に点けて喫い、与市兵衛の台詞の終る頃、又、煙管の雁首で火を点けようとすると火が消えるので、あたりが真暗になり、定九郎は煙草入れを懐中に入れ、「言うことはもうそれきりか、さらば引導渡してくれう」と、立上つて刀を取つて殺しになる行き方。丁度「天下茶屋」の東馬のような仕科ですが、あとは普通の手順で、前に記した中車と段四郎は、右の型を復活して見せたものでした。

尚、人形の方の殺しは「金が敵ぢや、いとほしや、……刀も抜かぬ芋刺しえぐ拵り」で、定九郎がおどり上り飛び廻り、石を拾つて刀の柄頭を叩いて打込むなどの科しもありますが、これは歌舞伎の舞台へは取入れてないようです。

又、近年の定九郎役は、誰も花道を遣う者がなく、与市兵衛を先へ出して置いて、掛稲の中から手を出して財布を取り、ここで始めて白塗りの顔を見せる方が見栄えがあつて、得であるために、これが一定の型のようになりました。

鉄砲渡しの簀

五段目の「鉄砲渡し」の勘平は、肩入れの着付けに簀笠の拵えが定式ですが、昔の役者はこの簀に水を掛けて、雨に打たれた様を見せたものです。それを五世菊五郎はもう一倍深く凝って、『忠臣蔵』の出る時には、男衆が楽屋入りをすると共に、簀を楽屋風呂の羽目へ吊るさせて置くのが、丁度五段目の幕の明く頃には、全体に湯気が沁み渡って、シットリと雨に濡れた湿気を感じさせる工夫をしました。これは六世菊五郎も学んでいましたが、先代がお召松坂縞に茶返えしに、菊五郎格子の肩入れを着たのに対して、六世は体が太っていたので鼠返えしの菊五郎格子に改めました。他流では緋の肩入れを遣うのもあります。因みに鬘は甲羅付五分月代の袋付、鬘は麻で結び後に捌くこと。又着替えの着付は浅黄羽二重、丸に鷹の羽の五つ紋正絹の通し裏で、前後共に瓦ケ茶の帯、襦袢は黒八丈の襟付の柳袴り、下りは藍絞りの柳縞で、山道染の手拭を持つのが、音羽屋の家の定めです。

顔の見合せ方

六段目の勘平は、三世梅寿菊五郎が一挙手一投足に細心の工夫を凝したものに、五世菊五郎の苦心を加えて完成した演出で、これをくわしく述べるには、全部の型に渉らなければなりません、ここに二三の例を挙げて見れば、先ず揚幕を出る姿は吾妻からげの拵え、草鞋履きで左肩に簀と手甲を結び付けた鉄砲を担ぎ、花道よき処でお軽の乗っている駕に出会い、棒先を左右に除け、鉄砲を右肩に担ぎ替え、左手で棒先きを左へ寄せるので、丁度お軽と顔を見合わす段取になって、「お軽じゃないか」と言うと、お軽が「こちらの人」と言うので、「獵人の女房が、お駕でもあるめえじやアねえか」と、この台詞を一寸持って言い、棒先を突くので駕屋があとじさりに、舞台へ戻る手順が無理なく付けてあるのですが、近年ではこの辺が粗略になっています。

紋服を着る訳

我が家へ帰り着いた勘平が、格子外の小流れで洗足すすぎあしをするのがありますが、音羽屋系にはこの仕科はなく、格子に入って、鉄砲と煙硝筒等の持物を、母親と女房とに渡し、お軽が盥たらいへ水を取って出すので、足を洗いながら夜前の雷雨の話などをして、この場に合わせている一文字屋お才と、判人源六を訝るセリフがあって、雨に濡れた着物を着替える処。音羽屋系ではここで紋服を用いるのを「どういう理由か」との疑問もあるようですが、菊五郎の解釈では、前場で逢った元朋輩の弥五郎が、いつ尋ねて来ようも知れないので、せめて昔の武士の姿で、対面をしたいという心に説明されています。又、菊五郎型で着物を着る時に、帯を輪形に解いて置くのは、場所の幅を取らない工夫で、着物を替えてから再び右の輪形の中へ入って、帯を取上げて締めれば居所も狂わず、位置も変わらずに済むという、一つの行儀になっています。

三段に遣う手

勘平は母の口から「娘を売つて金整える」話を聞いて、「それで様子ががらりと分りました」と言い、「先づ以て親父様の御志」と両手を畳へ置いて、親与市兵衛へ一礼の心を現わし、次ぎに左手を膝の上へ上げ、右手を突いた儘で、母に向い、「御前様の思召し」と礼を言い、次に右手も膝へ上げてお軽を見て、「女房の親切、忘れはおかぬ、忝けない」とやさしく言う。この手を三段に遣う表現法などは、勘平の演技の中でも、よき工夫の中に数えられています。

たばこぼん 蓆盆の片付方

お軽は父与市兵衛の帰りの遅いを案じて、門口へ出て向うを見る処、揚幕の中に森があり、家のあるつもりで見ろと言ひ伝えのある^{くだ}件りですが、お軽の左足が勘平の右膝と一直線になるようにすること。そうして、この時の勘平の捨台詞を一緒に口の中で言って、その台詞の切れた処で振り向いて、勘平と顔を見合わせる段取。「お軽茶を一つくりやれ」と呂の声で沈痛に言うまで、以上の手順が口伝になっています。それから勘平は一文字屋の財布を借りて、懐中の財布と見比べるところ、チョボの^ゝ袂の財布引合せば、寸分違わぬ糸入縞になって、借りた財布の前へ置き、煙管を取り蓆入れを引寄せるのに、煙管を見ずに取りれるように、煙草入の根付へ煙管を乗せて置くことも心得の一つです。

煙草へ火を点ける形は左膝を前へ出し、稍々下向きになって、左手を内懐中へ入れて前場の財布を持ち、右手の煙管を裏向けの雁首下りに持って、下に置いてある財布を見比べ、縞柄が同じなのに驚き、思わず右手を震わせて、煙管で向うをさしながら取落すのが、^ゝさては夕べ鉄砲で打殺したは^{しゅうと}舅であつたか」となる順序。ここへお軽が茶を汲んでくる段取です。お軽は右の勘平の仕科の間に、下手の後ろ寄りて茶を注ぐのにも寸法があつて、盆と茶碗を拭いて後、土瓶へ湯をさしてから茶を注ぐように、五世菊五郎にやかましく言われた六世梅幸は、無理なくこの間を保つことを、毎日工夫を替えていたのを覚えています。

尚、この場の勘平の動きには、一つ一つに工夫のある中で、一寸見物の気付かないことを挙げて見れば、一文字屋お才と源六が外へ出る頃、勘平は両手を下に置いて、首を下げていながら後の邪魔にならぬように、煙管を煙草入れの筒へ納めるのに、吸口の方から入るのが、間違いなく素直に入る口伝であり、又、その煙草入れを蓆盆の^{つる}蔓に掛けて置くのも、蓆盆を捌けば煙草入れも一緒に片付いてしまえる工夫です。

財布の取扱い

^ゝ身の誤りに勘平は、五体に熱湯の汗を流し」の演どころが済んで、前非を悔ゆる科しに両手で両鬢の毛をかきむしり、身を悶えながら裏向きに打伏して、^ゝ深編笠の侍二人」の出になる間、勘平は畳の敷目に仕込んである、鏡と顔料を取り出して、その^{あおずみ}青黛で顔を青くすることも、見物の気付かない仕事になっているのと、又、二人侍の来訪に驚いて、

「折あしければ勘平は」で、裏向きの儘身体を起こし、本来すぐ下向きになる手順のところを、上手から表へ向き直るのも、ここで芝居をする用意であって、前に落ちている財布を拾い上げ、見物には内懐中へ入れると見せて、実は襦袢の下肌へ入れて、背中へ廻して置くのも口伝の一つ、後で出すのに血糊の付かない、用意の方法になっています。そうして、二人侍を迎える為に、刀を突いて立上ろうとして、髪かみの乱れに心付き、左手に刀を横たえて少し抜き、それに写して右手で、左右の鬢かみを掻き上げ、鬢かみを直し、襟を合わせ、刀を鞘さやに納める時に、鏗つばの音をさせるのがキッカケで、母のお萱かたが止める段取に出来ています。尚、立上ろうとして刀の鞘さや走るので、それを鏡にして髪かみを直す演出もあります。

血汐の付け方

勘平の切腹の件りは「様子を聞けば情けなや、金は女房売つた金、打ちとめたるは」で、刀を左の脇腹わきに突立て、「舅殿」と倒れるので、二人侍が左右から「オ、何んと」と言うのが、床の「ツンツ、\、\」の三味線さんまいせんで勘平は起きると、腹の血汐あぐらを塗って、胡座あぐらの形になって苦痛くるしみの科し、ここから下座の篠入しのりの合方を弾いて、原作にはない入れごとの「如何いかなればこそ勘平は云々」のセリフの中「束の間御恩ごおんを忘れぬ身が、色」と言いかけと言いいしぶり、「色いろに耽たつたばつかりに」と、右手で自分の頬ほを打つので、手形の血糊あぐらが付き、更にその手が外れて左足の脛すねへも血ちを付くのが、一層顔が青ざめて見える工夫です。但し、この血ちの付け方は、次の台詞の「言い訳いわけなさに勘平が」の文句でする時もありましたが、右の台詞はすべて、腹の皮を背中へ付ける心で言うのが口伝くつでんとなっています。それから二人侍に抱かかえられて、与市兵衛よしべゑの死骸しがいを見に行き、鉄砲てつぽう疵ずきであることが知れて、「お疑ういは晴はれましたか」と聞くところは、右手で膝ひざを折よってかしまつて言うこと。更に「腹はら十字じゅうじに搔か切きつて」のところも、苦しき息いきの中に座り直して切り、臍へしを擱おみ出しして血判ちぢをする段取で、最後の「哀あれ」で本釣鐘ほんつりかねを打込み、指ゆびを一本ずつ組合あわせる合掌あがつしょうの幕切まくきりれを、六世菊五郎むくごろうの註文ちゅうもんは「勘平は死んで行く人だから、淋しみしく語かたって鐘かねも薄うすく打うってくれ」と、合理的な写実あつらの詭あつらえでしたが、五世菊五郎ごせきごろうは「陰気な長丁場の跡だから、段切はキツパリと締しめて盛も上げた方がいい」との、純歌舞伎じゆんかぶき式の好みであった役者でした。

勘平切腹の血

勘平の腹切りについては、いろいろな演技が伝わっていて、前に述べた「打ちとめたるは」で、二人侍が与市兵衛よしべゑの死骸しがいをあらために行くことにして、その間に、後ろ向きで腹を切る団蔵だんざう型。近年では座った形で腹を切り、後ろへも倒れないのですが、これは、侍の心でしようけれど、あのあばらやの道具建たから見ても、世話味せわあじに欠けた堅苦しい感じがするのと、もう一つ与市兵衛よしべゑの死骸しがいを見に行くところで、「ドーレ」と膝頭ひざかぶへ手をかけるので、そこへ血糊あぐらが付く段取も、箇所が箇所だけに色彩美にも欠けて、哀あれが薄うすく思おもわれます。

お軽役の口伝

次にお軽の出場所は、三段目の道行を除いて、門外と六段目と七段目ですが、この三場共に出る時には、六段目だけ眉毛を落すのが定めになっています。そうして、門外は娘の心、六段目は腰元の心、七段目は世話女房の心で勤めるのが口伝です。六段目の拵えは島田鬘、栗梅の石持、襟付の着付、黒緇子の丸帯に緋縮緬の背負い上げ、（浅黄を用いるもあり）紅絹の丸括けの帯締めが半四郎の型で、御殿奉公をした女に見せる心得としてあります。殊にこの六段目の身売で、勘平と別れる件りは腰元の性根と行儀を保って、以前よく行われた膝へ手を掛けることや、黒塗りの丸盆へ勘平の顔を写して、色気を見せる仕科などは略されて、茶を運ぶ盆を捧げて持つこと、門の格子の開閉に、下の方へ手をかけるのも、腰元行儀を見せる所になっています。尚、この場のお軽は駕へ乗ることが二度ありますが、いずれも素足のこと。草履を履くのは、門へ与市兵衛の帰りを見に行く処と、女衛に蓑盆を渡すところだけです。

二包みの小判

二人侍は普通原郷右衛門と千崎弥五郎の両名ですが、郷右衛門の方を不破数右衛門、乃至は堀部弥兵衛、或いは吉田忠左衛門と名前を替えることのあるのは大星由良之助に扮する、同一の役者がこの役を引受けるような場合、その年齢を老けて見せるために始めたことです。二人侍の出は床の「深編笠の侍二人」ですが、中には下座へ取って「蕨の細道」の唄入りの合方で出るのもあって、下手の奥から子守を出して花道で行違い、勘平の家を尋ねて舞台へ掛るのがあります。

団十郎が、この郷右衛門に出た時、「コリヤ勘平、お身やどうしたものじゃ」と扇をポンと置くところ。台詞の言い廻しに、深みと人情が籠って大好評であったのが、今日に至るまで一つの型になっていますが、もう一つ「渴しても盗泉を喰わずとは義者の誠め」と言ったのは、重言と思ひ違えての誤りであって、「盗泉の水を飲まず」というのが至当であるのは勿論ですが、右の間違いまで団十郎の型として近年まで行われていたのは、よしあしに拘らず団十郎が手本とされていた実証です。又、弥五郎役は、勘平調達の金を、非義非道の物として突返すところ、ポンと置いて前へ走らせ、取りいい処へ運ぶのも定めになっています。又、団十郎がこの弥五郎役を勤めた時、「この弥五郎は申さぬぞ、イヤサこの則安は言わぬぞ」と名乗りを調べて言ったことと、尚、原作には「近江槍の田楽差し」とあるのを、「新刀なれども長曾根虎徹」と言ったのも、共に団十郎から始まったことであり、最後の「四十九日や五十両、合わせて百両百箇日」の件りは、金包の取扱いがいつも問題になって、その半分を残して、お萱が仏壇へ供えるのがありますが、これは二包とも郷右衛門が持って帰るのが正しいのです。

鉄砲の取扱い

六段目へ出る獵師、滅法弥八、狸の角兵衛、種ヶ島の六蔵の三人の中、先頭の弥八が三

挺の鉄砲を手拭でからげて担ぎ、門口までやってくると、跡の二人は戸板へ乗せた与市兵衛の死骸を家の中へ運び、仏壇の下へ頭を上手にして元の門口の外へ出ると、この時に弥八は鉄砲をからげた手拭を解き、一挺ずつを二人へ戻して後、自分の手拭を襟へかけて結ぶので、三人が同じ形になるわけで、こんな些細なことまでも、手順の工夫が付けてあります。そうして、与市兵衛の死んでいた話をして帰りがけ、花道へ掛って一寸ふざけた台詞があって、かねて貸した道具の取れないことなどを言い、「苦勞する墨するであろう」「のこぎり惜しやかんなしや」「ほんに思えばそうしそうし」など、二三の演出形式が行なわれているのは、長い愁嘆場の間へ、息抜きを入れたものですが、これらはくどくならない程度をよしとしてあります。

後ろ向の腹切

団蔵の勘平にもいろいろの型がある中で、菊五郎系と違うところは、鬘が五分月代でなく吹毛の誂えであること。衣裳は「鉄砲渡し」が夜具縞の筒袖。六段目で葛籠から紋服を出して、イヤイヤこれを着ては相済まぬと、紋所を拝するだけでやめにして、肩入の平常着を着用する手順。又、財布を比べて見る処は、前場の財布を右手で内懐より出して、左手に持ったお才の財布と見合わせる段取で、この際、煙管は遣わないやり方。二人侍の来訪には、お萱をポンと当てて、絃に乗ってあとへ下り、両手を帯の辺りに重ねて極るなど大分芝居をします。更に切腹の件りには、二人侍が与市兵衛の死骸を改める間に、後ろを向いて右足を立てた形で刀を突き立て、その右足を震わせるなどの技巧があって、落入りに元の武士に立返った心で、母親が紋服をかけてやりますが、この紋服に黒二羽重を用いて、三段目の道行の衣裳を見せるのもあります。

名前のない役

六段目の母親は原作では名前がありませんが、その後にお宮、又はお沢などの役名が出来て、幕末になってお萱と定まったように伝えられています。その外、一文字屋の亭主も原作には名前がなく、徳右衛門で勤めたこともあれば、才兵衛と名付けられたこともあり、この才の字を取って、お才が常例となり、更に、判人の名前も閻魔えんまの小兵衛で出たのが最初で、源六と呼ぶのは後世のことだと言います。その中でも、むずかしいのはお萱の役で、これには勘平も協力しなければならず、「言われぬ証拠はこれ爰こゝに」と、勘平の懐中の財布を引き出す処などは、勘平の内懐中から手を押出して、財布の取りいようようにして置き、お萱がこれに手をかける時には、胸を押えて一度に出ないようにしてやること。又、この財布を捨てる時には、勘平の取りい位置へ投げる等、いずれも口伝になっていて、すべてに相手方を考慮に入れた細密な工夫が凝されてあります。

三十郎のお萱

これは昔話ですが、五世菊五郎がまだ若い時、勘平を勤めたのに対し、尾張屋三十郎が

お萱に付合っていた処、菊五郎としてはその仕科に満足せず、頭取を呼んで、「明日からお萱の役を誰にか取替えてくれ、あれでは俺には出ていられねえ」とのことに、頭取は仕方なく、この旨を三十郎へ伝えると、「そうか、承知したが、もう一日だけ出てやると言
ってこい」と、その日は本気になって見せたのを、幕が締ると菊五郎がことごとく感服して、「恐れ入った、素晴らしい腕前だ」と、改めて礼を尽くし、千秋楽までの出演を頼んだと共に、翌日から舞台の上で、勘平の呼吸まで教えられたとの話が残っています。その時、三十郎は「小僧め、俺のお萱で勘平を勤めるのはまだ早過ぎる」と言ったそうです。